

ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団 予言と死の問題

Harry Potter and the Order of the Phoenix — the Prophecy and Death

竹 田 伸 一

Shin-ichi TAKEDA

序

ハリー・ポッターシリーズの第5巻、不死鳥の騎士団は2003年6月21日に出版され、2004年9月1日に日本で翻訳本が出版された。これまで爆発的なヒットを続けてきたこのシリーズだが、読後なぜか釈然としないものをわたしは感じた。評論では前作よりも文学的な評価が高いのだが¹⁾、残念ながら、あまり面白くなかったのである。ヨーロッパで出会った子供や大人の読者たちの多くも、翻訳本を読んだ日本の読者たちも同じような感想を言っていた。なぜだろうか。それは第一に読者が最も自己投影しやすい、主人公ハリーの心理が混乱を極めているからだろう。怒り、焦燥、絶望、嫉妬、癩癩、イライラ、爆発、いつも混乱しているからである。著者ローリングは15歳という年齢を、疾風怒濤の青年期の混乱の頂点と位置づけているのであろう。ハリーのイライラを助長する存在として、新任の闇の魔術に対する防衛術の教師、高等尋問官ドローレス・アンブリッジの登場は成功しているが、同時に読者のイライラも助長することになっている。また第二に読者に失望と悲しみをもたらした出来事は重要な登場人物であ

り、ハリーにとっての心許せる唯一の家族と呼べるシリウス・ブラックの死である。不死鳥の騎士団の本部兼自宅であるグリモールド・プレイスにずっと閉じこもらず得なかったシリウスはハリー以上に焦燥感と孤独を抱えた存在だった。第5巻終盤で死喰い人と対決するシリウスは軟禁状態からの自由を得るが、あまりにもあっけなく逝ってしまった。さらにその死の責任をハリー自身が抱え込むこととなったのである。

ある意味で死の問題は第5巻の底辺を流れる一つのテーマとも言える。タイトルの不死鳥の騎士団自体からもその一端が窺える。ムードィがハリーに見せた不死鳥の騎士団創設メンバーの写真には22人の人々が写っているが、一人は裏切り者となり、2人は発狂するまで拷問され、9人は殺されている。その中にはハリーの両親も含まれているのだ²⁾。そして、今回ヴォルデモートの復活に際して、新たに結成された不死鳥の騎士団のメンバーの一人、シリウス・ブラックが亡くなるのである。その他にも死の問題は、第9章のウィーズリー婦人の嘆きの原因が愛する人々が死ぬかもしれないという恐怖に現れ、人の死を間近に経験した者にしか見えないというセスト

ラルという動物にも象徴されている。

予言

ところで、最終的にヴォルデモートが死喰い人を使って求め続けたものは自分とハリーに関する予言だった。本巻ではヴォルデモートは予言を手に入れることに失敗するが、ハリーにはダンブルドアを通じてその内容が開示される。その内容から分かることだが、この予言を軸にハリー・ポッターシリーズ全体が構成されていると同時に、今後の展開が更に予想されるわけである。この予言は16年前にシビル・トレローニーによってなされたものである。彼女は2年前に（第3巻で）ヴォルデモートの下僕の帰還とその復活も予言していた。

「ことは今夜起こるぞ……闇の帝王は、友もなく孤独に、朋輩に打ち棄てられて横たわっている。その召使は十二年間鎖に繋がれていた。今夜、真夜中になる前、その召使は自由の身となり、ご主人様のもとに馳せ参ずるであろう。闇の帝王は、召使の手を借り、再び立ち上がるであろう。以前よりさらに偉大に、より恐ろしく。今夜だ……真夜中前……召使が……そのご主人様の……もとに……馳せ参ずるであろう……」³⁾

この預言は3巻とそれに続く4巻を導くものとなっている。1巻でクィレルが死んだ後ヴォルデモートはどうかナギニという大蛇に寄生し、そのエキスを吸収することで生き延びていた⁴⁾。この第二の予言の時点ではヴォルデモートの下僕が誰なのかはうまく伏せられていて、アズカンバンを脱走した囚人シリウス・ブラックが最も怪しい存在として浮上する機能を担っていた。そして第3巻終盤で

下僕は、ロンのネズミとしてずっと潜伏していたピーター・ペティグリュウであることが明らかになる。第4巻ではこのペティグリュウ通称ワームテールの手助けによってヴォルデモートがアルバニアの深い森で発見され、一角獣の血と大蛇の毒の魔法薬で小さな人型にまで回復に至り、ヴォルデモートの父親トム・リドルの遺骨とワームテールの切り取った手の肉と敵であるハリー・ポッターの血によって、遂にヴォルデモートが本来の姿へと復活するのであった⁵⁾。

ハリー・ポッターだけではないが英国ファンタジーの背景にはヨーロッパキリスト教の伝統があることは否めないだろう。本稿では聖書におけるキリストとサタンに関する予言を参考にして、ハリー・ポッターの予言を考察していきたい。第五巻の明らかにされるヴォルデモートとハリーについての予言はまず、闇の帝王に敵対する者の誕生が予言され、その後の両者の運命が語られている。

聖書におけるキリスト誕生の予言はいろいろあるが、代表的なもの一つにイザヤ書9章をあげることができる。また、キリストとサタンに関する運命の予言として創世記3章をあげることができる。

イザヤ9:5 ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君」と唱えられる。

創世記3:15 お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く。

イザヤ書9章の前半部分がマタイ4章15-16節に引用され、メシア予言と解釈されているように、9章5節は、重要なクリスマスの

予言としてキリスト教会では解釈されてきた⁶⁾。そこでは一人の赤ん坊の誕生が救い主の誕生と語られている。また、創世記3章15節は初代キリスト教会の教父エイレナイオス以来「原始福音」として解釈されてきた⁷⁾。ここではアダムとエバを誘惑して人間を墮罪に導いた蛇が呪われ、蛇の子孫と女の子孫の間の敵意が語られている。蛇の子孫とはサタン、悪魔を意味し、女の子孫とはメシア、キリストと解釈される。サタンがキリストのかかとを砕くことは十字架を意味し、キリストがサタンの頭を砕くことを最終的な勝利を意味するものと解釈される。

まとめるとイザヤ書ではやがて救い主キリストが赤ん坊としてこの世に誕生することを予言し、創世記では人間の子孫として救い主キリストが登場すること、その敵対者、サタン、悪魔は蛇を象徴するものとして登場するが、両者の戦いの末、キリストは死の苦しみを味わうが、最終的にサタンに勝利するという構図が成り立つ。悪玉の象徴として蛇を用いることは、ハリー・ポッターシリーズが聖書から受け継いだ伝統と言えるだろう。それだけではなく、キリストとサタンが敵対しながら救済史を導き、終末の最後の審判に至る構造は、善玉のハリーと悪玉のヴォルデモートが対決しつつ最後のクライマックスに至るプロットとしてシリーズに取り込まれている。予言を手掛かりにシリーズを概観してみよう。

闇の帝王を打ち破る力を持った者が近づいている……

七つ目の月が死ぬとき、帝王に三度抗った者たちに生まれる……

そして闇の帝王は、その者を自分に比肩する者として印すであろう。

しかし彼は、闇の帝王の知らぬ力を持つであろう……

一方が他方の手にかかって死なねばならぬ。なんとすれば、一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ……

闇の帝王を打ち破る力を持った者が、七つ目の月が死ぬときに生まれるであろう……。⁸⁾

The one with the power to vanquish the Dark Lord approaches … born to those who have thrice defied him, born as the seventh month dies … and the Dark Lord will mark him as his equal, but he will have power the Dark Lord knows not … and either must die at the hand of the other for neither can live while the other survives … the one with the power vanquish the Dark Lord will be born as the seventh month dies …⁹⁾

闇の帝王を打ち破る力を持った者が近づいている……

まず一行目ではヴォルデモートを倒す救い主の到来が語られている。

七つ目の月が死ぬとき、帝王に三度抗った者たちに生まれる……

その赤ん坊が7月末日に、ヴォルデモートから3回逃れた夫婦に生まれることが語られている。この時点では不死鳥の騎士団に属して、7月31日に子供が生まれた夫妻は二組存在した。フランク・ロングボトムと妻アリス、そして息子のネビル。彼らは魔法家に生まれ育った純血だった。もう一組はジェームズ・ポッターと妻リリー、そして息子のハリーだ。リリーはマグル出身のため、ハリーは魔法界では混血と呼ばれる。ヴォルデモート自身は純血主義者のスリザリンの末裔であるにも拘らず、父親がマグルであったため、混血であっ

た。ヴォルデモートは自分に似た要素のあるハリーをライバルに選び、殺害を企てたのだった。ヴォルデモートがハリーと似た点は第2巻ですでに指摘されている¹⁰⁾。

そして闇の帝王は、その者を自分に比肩する者として印すであろう。

ヴォルデモートが情報として知り得た予言は部分的で最初の2行だった。それ故、ハリー殺害を企てた結果としてハリーに印と力を与えることとなった。そして、自らは殺害の呪文アバダケダブラの反対呪文を受け、瀕死の重傷を負うこととなった。ハリーの額には稲妻型の傷がついたが、その傷は呪いであると同時に祝福でもあった¹¹⁾。額の傷については聖書の創世記4章で神がカインにつけられた傷が参照できる¹²⁾。アダムとエバの長男カインは弟アベルを嫉妬のゆえに殺害してしまう。罪責の念に苦しみ、地上の放浪者となるカインは命乞いをするが、そのとき神が与えたのが額の傷であった。その傷は他者からカインの命を守る祝福の印であると同時に、殺人者であることを示す呪いの印であった。ハリーの場合、傷を受けることによって、蛇語を話せるようなヴォルデモートの力の一部を受けた¹³⁾。また、第5巻では傷を仲介してハリーとヴォルデモートが互いの感情を感知することが明らかになってきた。

しかし彼は、闇の帝王の知らぬ力を持つであろう……

ヴォルデモートの知らない力とはいったい何だろうか。それは第1巻でも指摘されていた自らの命も投げ出す力、愛である。ハリーの母親は自らの命を犠牲にして、ハリーに反対呪文をかけて子供を守った。犠牲の死と愛はキリスト教の十字架の贖罪死と神の愛の中心使信であるが、著者ローリングは愛する者

を守るための死を究極的な愛の力と描いている¹⁴⁾。第5巻ではその力は「死よりも不思議で同時に死よりも恐ろしい力」と語られている¹⁵⁾。その力（愛）をハリーが持つゆえに、シリウス救出のためにハリーは神秘部に向かい、同時にシリウスはハリー救出のために神秘部に向かい、その命を落とすことになったのである。自分の命をも犠牲にする愛の力は、愛する者を救う力となるのである。

一方が他方の手にかかって死なねばならぬ。なんとになれば、一方が生きるかぎり、他方は生きられぬ……

今後のことになるが、ハリーは救世主としてヴォルデモートから世界と人々を救うために、自らの命を犠牲にすることになるのだろうか。また、著者ローリングがキリスト教をモデルとするならば、世界を救うためにハリーが死んだ後に復活もあり得るかも知れない。現時点で予言から示されることは、ヴォルデモートかハリーのいずれかが死なねばならない運命であるということだ。

闇の帝王を打ち破る力を持った者が、七つ目の月が死ぬときに生まれるであろう……。

予言を文字通り取ると、ハリーはヴォルデモートに比肩する力だけではなく、打ち破る力を持つことになるのであるから、最終的な勝利を得ることが予想できる。ただ、6巻でダンブルドアがヴォルデモートを倒す前段階の準備として、ホークラックスを壊すために、自らの健康を犠牲とし、遂には非業の死を遂げることとなる。それ故、第7巻ではさらに多くの愛する者たちの死も予想されるだろう。

死の問題

ハリー・ポッターシリーズでは第1巻から

死の問題が扱われてきた。それは主人公ハリーが孤児という設定であること、著者ローリングが出版数年前に母をなくした個人的な事情もあるが、ローリング自身が死の問題を人間の究極的な問題ととらえていることによるのであろう。著者の世界観はしばしば各巻の終盤でハリーへのダンブルドアの言葉の中で提示されている。

「死とは長い一日の終わりに眠りにつくようなものだ。結局、きちんと整理された心を持つ者にとっては、死は次の大いなる冒険に過ぎないのじゃ。」¹⁶⁾

「愛する人が死んだとき、その人は永久に我々のそばを離れると、そう思うかね？ 大変な状況にあるとき、いつにも増して鮮明に、その人たちのことを思い出しはせんかね？ 君の父君は、君の中に生きていたのじゃ、ハリー。そして、君がほんとうに父親を必要とするときに、もっともはっきりとその姿を顕すのじゃ。」¹⁷⁾

ダンブルドアは整理された心を持つ者にとっては、死は恐れるものではないと語り、亡くなった最愛の人たちも生きていた人の心の中で生き続けると語っている。しかし、今回名付け親のシリウス・ブラックを失ったハリーの心は罪悪感と後悔と怒りと苦しみで爆発してしまう。ダンブルドアに当り散らし、校長室にあるものを壊し、「なら——僕は——人間で——いるのは——いやだ！」と大声で叫んでしまう。ハリーは何とかしてシリウスとの関わりを求めようと、「両面鏡」を取り出す。シリウスの応答はなかった。そして、ゴーストのニックに質問するのだった。その結果わかったことは、魔法使いだけがゴーストになれること。死ぬことに恐怖を感じる者は、死の代わりに生の擬態としてゴーストになり、残ることを選べる。ただ、シリウ

スの場合、向こうの世界に逝ってしまうだろうということだった。母親の死を経験したためにセストラルが見えるルーナ・ラブグッドとハリーは言葉を交わすが、彼女は死んだ母親と再び会えるという希望を持っていた。彼女は神秘部のアーチのある部屋のベールの裏側に死者の世界『あそこ』があると考えるらしく、死者たちは「みんな、見えないところに隠れているだけなんだ」と語る。シリウスはくしくも神秘部のその部屋でアーチをくぐり抜けてベールの彼方へ消えて行ったのだった¹⁸⁾。どうやら、第5巻ではベールの裏側の『あそこ』を不明瞭な死者の世界と描いているようである。それはキリスト教の死者が行く黄泉の世界にも似ている。黄泉については聖書でも明瞭ではなく、死者が眠りにつく世界としばしば描かれており¹⁹⁾、最後の審判の際に死者はそこから復活して裁きを受けるという考え方がある一方、キリストの黄泉への降下と復活のゆえに聖徒たちは共に天に引き上げられたとする考え方もある²⁰⁾。いずれにしてもキリスト教信仰では黄泉は暫定的な死者の停留所であり、最後の審判で人間は第二の死、滅びか、天国への救いに選別されるのである。

ハリー・ポッターの世界では肖像画などは生前の人々の人格の一部を宿していて、生きている人々に協力したりする。また、死の恐怖とこの世界に執着がある魔法使いがゴーストになる一方、悔いのない人生を送ってきた者たちは死者の世界に行ってしまうようである。第4巻でハリーがヴォルデモートと対決する際、兄弟杖が反応したため、直前呪文の効果でヴォルデモートに殺された死者たちがハリーを助けるくだりがある²¹⁾。第5巻でも『あそこ』は不明瞭だが、「ベールの裏側で人声がする」ことから、死者との再会や死者の復活に対するわずかな希望が窺える。5巻終

盤でヴォルデモートとダンブルドアが対決する場面があるが、ヴォルデモートは「死より酷いことは何もないぞ」と語りつつ、相手を殺そうとする。他方、ダンブルドアは「死より酷いことがある」と反論する。象徴的な場面だが、ダンブルドアに対してヴォルデモートが発した殺人の呪いを不死鳥のフォークスが身代わりに受け、燃えて死んでしまう。しかし、不死鳥は小さな雛として再び生まれるのであった。ハリー・ポッターシリーズでは不死鳥の存在が死の問題に対する一つの希望の象徴と言えるかもしれない。

文献

J.K.Rowling, *HARRY POTTER and the Philosopher's Stone*, Bloomsbury Publishing, Great Britain, 1997.

J.K.Rowling, *HARRY POTTER and the Chamber of Secrets*, Bloomsbury Publishing, Great Britain, 1998.

J.K.Rowling, *HARRY POTTER and the Prisoner of Azkaban*, Bloomsbury Publishing, Great Britain, 1999.

J.K.Rowling, *HARRY POTTER and the Goblet of Fire*, Bloomsbury Publishing, Great Britain, 2000.

J.K.Rowling, *HARRY POTTER and the Order of Phoenix*, Bloomsbury Publishing, Great Britain, 2003.

J.K.Rowling, *HARRY POTTER and the Half-blood Prince*, Bloomsbury Publishing, Great Britain, 2005.

J. K. ローリング, 松岡祐子訳, 『ハリー・ポッターと賢者の石』, 静山社, 1999年。(1巻)

J. K. ローリング, 松岡祐子訳, 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』, 静山社, 2000年。(2巻)

J. K. ローリング, 松岡祐子訳, 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』, 静山社, 2001年。(3巻)

J. K. ローリング, 松岡祐子訳, 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』, 静山社, 2002年。(4

巻)

J. K. ローリング, 松岡祐子訳, 『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』, 静山社, 2004年。(5巻, 本巻)

J. K. ローリング, 松岡祐子訳, 『ハリー・ポッターと謎のプリンス』, 静山社, 2006年。(6巻)

注

1) 廣瀬久充, 「ハリー・ポッター考(2)」, 『キリスト教と文化 第19号』, 青山学院大学宗教センター, 2003年, 101-102ページ。小林矩子, 「ハリー・ポッター・シリーズ第5巻, Harry Potter and the Order of the Phoenix と児童文学としての暗さについて」, 『武蔵野大学文学部紀要第5号』, 2006年, 8ページ。

2) 5巻上278-280ページ。

3) 3巻419ページ。

4) 4巻下454ページ。4巻上14, 17ページ。

5) 4巻下432-438

6) 鍋谷堯爾, 「イザヤ書」, 『新聖書注解旧約3』, いのちのことば社, 1977年, 543ページ。

7) 船喜信, 「創世記」, 『新聖書注解旧約1』, いのちのことば社, 1977年, 95ページ。松田明三郎, 「創世記」, 『旧約聖書略解』, 日本基督教団出版局, 1982年, 16ページ。

8) 5巻下652ページ。

9) J.K.Rowling, *Harry Potter and the Order of the Phoenix*, Bloomsbury, London, 2003, p.741.

10) 2巻465-467ページ。「ハリー・ポッター, 何しろ僕たちには不思議に似たところがある。君も気づいただろう。二人とも混血で, 孤児で, マグルに育てられた。偉大なるスリザリン様ご自身以来, ホグワーツに入学した生徒の中で蛇語を話せるのは, たった二人だけだろう。見た目もどこか似ている……。」

11) 5巻下654ページ。

12) 冬木亮子, 『ハリー・ポッターで読む伝説のヨーロッパ魔術』, 冬青社, 2001年, 46-47ページ。

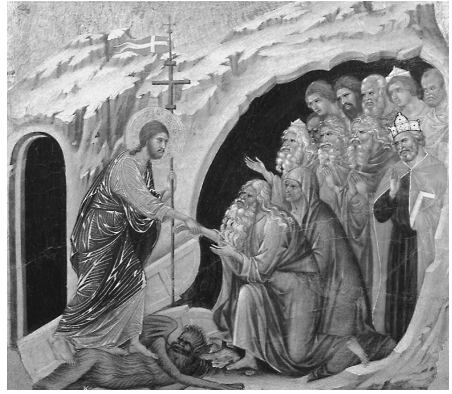
13) 2巻488ページ。

14) 1巻440ページ。「君の母上は, 君を守るために死んだ。ヴォルデモートに理解できないことがあるとすれば, それは愛じゃ。君の母上の愛

情が、その愛の印を君に残していくほど強いものだったことに、彼は気づかなかった。傷跡のことではない。目に見える印ではない……それほどまでに深く愛を注いだということが、たとえ愛したその人がいなくなっても、永久に愛されたものを守る力になるのじゃ。」

- 15) 聖書でも愛は死のように強いことが指摘される。雅歌8:6「わたしをあなたの心に置いて印のようにし、あなたの腕に置いて印のようにしてください。愛は死のように強く、ねたみは墓のように残酷だからです。そのきらめきは火のきらめき、最もはげしい炎です。」（口語訳）。雅歌8:6「わたしを刻みつけてください。あなたの心に、印章としてあなたの腕に、印章として。愛は死のように強く、熱情は陰府のように酷い。火花を散らして燃える炎。」（新共同訳）。
- 16) 1巻438ページ。
- 17) 3巻558-559ページ。
- 18) 5巻下597ページ。
- 19) 旧約聖書では死者の世界と交流する口寄せや霊媒は禁止されている。レビ記20:27「男であれ、女であれ、口寄せや霊媒は必ず死刑に処せられる。彼らを石で打ち殺せ。彼らの行為は死罪に当たる。」サムエル記上28章など。

20)



ドゥッチョ 「黄泉への降下」 1308-11年、
テンペラ板絵、51 x 53,5cm、シエナ

21) 4巻下470-474ページ。